

親友はロックスター

田端 ガリ

【人物一覧表】

川田 瑛治（26）：現場作業員

善（26）：人気バンドのボーカル

西本（24）：瑛治の後輩

星野（19）：路上ライブの青年

○車内・夕方

作業現場から帰りのトラックの車内。

西本（24）が運転をし、助手席に川

田瑛治（26）が座る。

瑛治、スマホをいじる、手には豆が出て
来ている。

車内は沈黙が続いている。

西本「：：音楽流してもいいっすか？」

瑛治「おお、いいよ。」

西本、スマホから善のバンド「SLI

DER」の曲を流す。

瑛治、少し気まずそうな顔をする。

西本「川田さん。知ってます？このバンド。」

瑛治「：：知ってるよ。」

西本「いいですよ。このバンド。」

瑛治「まあ、そうだな。」

西本「最初の頃の曲が僕好きで。最近の曲は
なんか路線ちよっと変わっちゃってあんま
りなんですけど：：」

瑛治「へー：：」

西本「川田さんってどんな曲聞くんですか？」

瑛治「どんな曲か……」

西本「川田さん、こういうセンスよさそうですもんね。」

瑛治「センスないから俺はここにいるんだけどな。」

西本「え？」

瑛治「なんでもない。売れなさそうなバンドを聞ってるよ、俺は。」

西本「（笑って）なんですかそれ変わってますね。」

2

瑛治「まあ、そうだな。」

○瑛治の家・夜

1 Rの散らかった部屋。部屋の隅には使い込まれたギターが置かれている。

瑛治、スマホでSNSを見ながらコンビニ弁当を食べる。

スクロールしていくと、「SLIDE Rの善はこれからのロック界を引っ

張っていく男になるだろう」という善の投稿が目に入る。

瑛治、スマホの電源を切り、画面を下にする。

○回想（８年前）・高校・教室

善（１８）「バンド組むんだけどさ、瑛治、ギターで入ってくれない」

瑛治（１８）「……」

○瑛治の家・夜

瑛治、ボーっと天井を見ながら座って、瑛治「こんなに売れるとは思わないだろう……」

スマホの通知の音がする。

瑛治、スマホを見ると、善からのメッセージで、「来週、飲もう。」と来る。

瑛治「マジか……タイムリーすぎるだろ。」

「飲みたいな」「会いたいな」と立て続けにメッセージが来る。

瑛治、悩んだ末、「ごめん忙しくて行け

ない。」と打つ。

送信ボタンを押そうとしたとき、「相談したいことがある」と善からメッセージが来る。

瑛治「マジで最後だからな……」

と、打ったメッセージを消す。

○（翌週）・居酒屋・個室席・夜

大衆居酒屋の個室。

瑛治、緊張した面持ちで善を待つ。

善「おつかれー！」

と、ラフな格好で入室し、座る。

瑛治「お疲れ。」

善「いやー疲れた。一緒に飲むのは初めてじゃない？」

瑛治「そうだな。てか、変装とかしなくていいの？」

善「え？しないよ。面倒くさい。てか、ばれないし。」

瑛治「そんなでいいのかよ。」

善「俺、別にカリスマじゃないんで。それより、飲み物頼もうぜ。」

瑛治「ビールだろ？料理も何個かもう頼んでるよ。」

善「お前……さすが社会人だな……感動したよ。」

瑛治、少し照れ隠しでメニューを見る。

× × ×

テーブルには料理とお酒が並んでいる。乾杯してからだいぶ時間が経ち、二人とも酔っている様子。

5

善、料理に手をつけ、

善「美味いわぁ。こういうのでいいんだよな。」

瑛治「……それで相談って何よ。」

善「相談？」

瑛治「言ってただろ。相談があるんじゃないの？」

善、数秒を考え込んで、

善「（思い出して）ああ！ないよ。」

瑛治「は？」

善「ないない。お前、相談あるとか言ったら
お人よしだから来るだろうなって思ってた。」

瑛治「お前なあ……」

善「あ、まんまと引っかかった感じ？」

瑛治「帰ろうかな……」

善「ごめん。ごめん。今日奢ってやるからさ。」

瑛治、眉をピクリとする。

瑛治「ロック界を引っ張る男だもんな。」

善「（苦笑いで）やめろよそれ。恥ずかしい。」

瑛治「何が恥ずかしいんだよ。名誉なことだ
ろ。」

6

善「俺、ロック界を引っ張る気ないもん。知
らないし。ロック界がどうなろうと。」

瑛治「知らないって。ロックが廃れたらお前
も困るだろ。」

善「困らないよ。廃れてもやるのがロックだ
ろ。」

瑛治「廃れたら、食べていけないだろ。」

善「かもね。（どや顔で）何度も言う。それで
も俺は自分の音楽をする。バイトでも何で

もするよ。そのためなら。」

瑛治、深いため息をしてうつむく。

善「（笑いながら）何よ。」

瑛治「いっそのこと、嫌な奴になっけてくれば
たらって思ってた俺が馬鹿だった。」

善「……やっぱり、俺のこと避けてた？」

瑛治「そりゃそうだろ！お前をずっと避けて
きた！お前のことを見てたら、S L I D E
Rの誘いを断らなかったら俺は今みたいな
クソな仕事をしないでお前みたいにキラキ
ラした世界に行けたのかなとか。考えたく
なくとも考えちゃうわ。」

善「……ならお前もやればいいじゃん。」

瑛治「何をだよ。」

善「音楽だろ。」

瑛治「俺がやっても、お前みたいにはなれな
い。」

善「俺みたいにする必要はないだろ。音楽は
……」

瑛治「（話を遮り）俺は……お前みたいになり

たかった。」

善「……音楽は自由だぞ。」

瑛治「売れてない奴の自由な音楽なんて価値がないだろ。」

善「価値ね……」

瑛治、お酒を一気飲みする。

善「（瑛治を見て）おいおいおい、すごいな。」

瑛治「（飲み干し）お前と会うのは今日で最後だ。嫌な奴に俺がなってやる。死ぬほど飲んで潰れてやる。絶縁するって言わせるぞ。」

善「（笑いながら）いいねえ。俺の大好きな瑛

8

治だ。」

瑛治「うるせえ！」

といい、呼出ボタンを勢いよく押す。

瑛治「（大声で）レモンサワー！」

善「いや、ボタン押した意味よ。」

○飲み屋街・深夜

瑛治、ひどく泥酔し、千鳥足で歩く。

善、瑛治を支えて歩く。

善「今日、お前を誘って正解だよ。」

瑛治「嫌いになれよ。なんのために俺はこんなに飲んだんだよ。」

善「嫌いにはならないよ。昔も今もお前は最高にロックだ。」

瑛治、善の前に立ち、

瑛治「俺のどこがロックなんだよ。お前に相談があるって騙されて呼ばれて、嫌われようと酒をたらふく飲んでいる俺が。」

善「そういうところだよ。」

善と瑛治、路上ライブをしている星野（19）を見つける。路上ライブの周りに人はいない。

善「お！路上ライブだ。」

瑛治「さっき言っただろ？売れてない奴の自由な音楽に価値はないんだよ。」

善「まあ、聞いてみようよ。」

瑛治と善、星野の前に立つ。

星野、自分の世界に酔いしれるように歌う。

瑛治「お前に気付かないって、自分の世界に入ってるな。」

善「素晴らしいじゃん。あと、純粹に俺のこ
と知らないんだろ。」

星野、歌い終わる。

善、拍手をする。

星野「（善に気付き）え！SLIDERの！」

善「良いね。最高だったよ。」

星野「ありがとうございます！（パニックになっ
て）え、え？なんでここに？」

瑛治「ほら、お前のせいでパニックになっ
てる。」

善「君、名前は？」

星野「星野です！」

善「星野君ね。ちよっとギター貸してくれな
い？」

星野「え？はい……」

瑛治「お前、やめろよ。」

善、ギターを受け取り、チューニング
をする。

善「（ニヤニヤと）いいじゃんちよつとくらい。」

瑛治「よくないだろ。そもそもこの子の路上ライブだろ？」

星野「俺は全然！」

善「ほら。星野君もこう言ってる。」

瑛治、深いため息をする。

善、深呼吸をした後、SLIDERの曲を歌い始める。

待ちゆく人々が善に気付き、周囲に集まってくる。

星野、キラキラした目で善を見る。

瑛治、観覧客の端の方でしゃがんで見る。

瑛治、善の気持ちよさそうに歌う姿と観覧客の嬉しそうな顔を交互に見る。

瑛治「（ぼそっと）なにがカリスマじゃないだよ……」

善、サビに入る前に「ニカッ」と笑う。

瑛治、善を見てハッとする。

○回想（８年前）・高校・教室

善、気持ちよさそうに歌う。

瑛治、善の歌に乗りながら見る。

善、サビに入る前に「ニカッ」と笑う。

○飲み屋街・深夜

善、歌っている瑛治をじっと見る。

瑛治「あいつ変わってないな。」

善の周りに待ちゆく人たちがさらに
集まってくる。

みんな、音楽に乗って体を揺らしてい
る。

瑛治「いや、俺が変わったのか。」

星野、瑛治の横に来て、

星野「すごいです。」

瑛治「な。すごいな。」

星野「みんなスマホで撮らないんです。」

瑛治「え？」

星野「善さんみたいな人がこういう路上ライ
ブやるとき、普通、みんな動画を取り始め

るんです。でも、善さんは違う。」

観覧客、スマホで撮っていたが、徐々にスマホをしまい、聴き入る。

星野「なんだこれ……」

瑛治「すごいな。」

星野「はい。すごいです……」

善、チラッと瑛治の目を見てニヤリと笑う。

瑛治「（苦笑い）これがお前のロックか……」

善、歌い終わる。

観覧客から拍手の嵐で湧き上がる。

善「ありがとう！」

観覧客、さらに湧き上がる。

星野「夢見たいです。善さんに僕のギター弾いてもらえるなんて……」

瑛治「夢ね……」

善、瑛治の方を見て、ギターを掲げる。

善「瑛治！」

瑛治「（訳が分からず）ん？」

善「なにぼさっとしてるんだよ。来い！」

瑛治「（ポカンとして）は？」

善、ギターを置き、瑛治コールを観覧客に煽る。

善「瑛治！瑛治！瑛治！瑛治！」

観覧客も訳が分からないまま善に従う。

観覧客「瑛治！瑛治！瑛治！瑛治！」

瑛治「いやいやいや。」

星野「行きましたよう！」

瑛治「いや、無理無理。ギターなんてしばらく触ってないし……」

星野「いいからいいから！」

と、瑛治の背中を強く押し、善の前まですす。

止まらない観覧客の瑛治コール。

善、ギターを持ち、瑛治に差し出す。

善「（ニヤリと）今、路上ライブやってるんだけどさ。瑛治、ギターで入ってくれない？」

瑛治、鼻で笑う。

瑛治「断るって言ったら？」

善「絶縁してやるよ。」

瑛治「それは困るわ。」

瑛治、ギターを手に取る。

観覧客から声援が鳴り響く。

善「俺、こいつに高校生の時、バンド組もうって言ったら断られたんすよ。俺の知ってる中で一番ギター上手かったんです。いいやつだし。断られると思ってなくて。俺、それからこいつに後悔させようとめっちゃ頑張ったんですよ。頑張って頑張ってやっ
と売れてきたんです。世間ではロックスターなんて言われて。でも、振り返って自分の曲聞いてみると、俺の好きな音楽じゃなかったんです。……だからやめました。ロックスターは。好きなことをやります。自由
に。」

善、瑛治の方を見る。

善「（真面目な顔で）自由に。」

瑛治、高校の時に善が歌っていた曲を弾き始める。

善、ギターの音色を聴いてニヤリとする。

善「（ぼそっと）何がしばらく触ってないだよ。」

瑛治、観覧客の方を見るのをやめ、善の背中をじっと見つめる。

善、叫ぶように笑顔で歌う。

瑛治、そっと目を閉じる。

○回想（8年前）・高校・教室・夕方

放課後の誰もいない教室。

瑛治、一人でギターを弾いている。

善、教室の扉からひよっこり顔を出す。

瑛治、善に気付いて、演奏を辞める。

瑛治「なんだよ。」

善「バンドに入る気になった？」

瑛治「ならない。」

善、残念そうな顔をしながら教室に入る。

善「えー、もったいない。」

瑛治「俺よりうまいやつはいくらでもいるだ

ろ。」

善「わかってない！お前は何もわかってない！」

瑛治「それがすべてだろ。」

善「俺は俺の音楽を理解してくれるやつとやりたい！」

瑛治「俺以外にもいるわ」

と、ギターをしまい始める。

善「お前以上はいない！」

瑛治「……就職決まったんだよ。諦めてくれ。」

善「ケチ！カス！ゴミ！」

瑛治「……小学生か？」

善「俺が音楽性で迷走したらお前のせいだからな！」

瑛治「知らないよそんなの……」

○飲み屋街・深夜

瑛治がギターを弾き、善が楽しそうに歌う。

瑛治、次第に笑顔になる。

× × ×

瑛治と善、横並びで歩く。

善「……うちのバンド入る？」

瑛治「嫌だよ。売れてるバンドに途中から入るの。」

善「えー、俺は何度お前に断られればいいんだよ。」

瑛治「……ありがとうな。」

善「え？」

瑛治「なんでもないよ。バカロックスター。」

と、走って善から逃げる。

善「おい！もう一回言え！」

と、瑛治を追いかける。

瑛治と善、人通りが少ない飲み屋街を少年のように走る。

○（翌週）車内・夕方

現場からの帰り道、走行中の車内。

運転をしている西本と助手席に座る

瑛治。

瑛治「音楽かけるか？」

西本「お、珍しいですね。お願いします。」

瑛治、スマホをスクロールする。

西本「あれですか？前に言ってた売れなさそうなバンドですか？」

瑛治「前に言ってたのとは違うけど、まあ、売れなくなるだろうな。」

瑛治、「SLIDER」の曲を流す。

西本「SLIDERじゃないですか。めちゃくちゃ売れるじゃないですか。てか、これ最近出した曲ですよね。」

瑛治「そうそう。」

西本「やっぱり、初期の方がいいなあ……」

瑛治「これは違う？」

西本「違いますね。」

瑛治「（笑って）俺は最近の方が好きだな。」

西本「えー、合わないですね。」

瑛治「そうだな。お前センスないな。」

西本「ひどい！なんでそんなこと言うんですか！」

瑛治「俺がロックスターだからだ。」

西本「なんですかそれ？」

瑛治「なんでもないよ。」

と、車窓からの景色を眺める。

○スタジオ

善、SLIDERのメンバーと楽しそうに練習をしている。

○車内・夕方

走行中の車内。

瑛治、笑顔で車窓を眺める。

手で音楽に乗り、リズムを取っている。

（完）